

Title	発話行為としての絵馬奉納
Sub Title	
Author	久保田, 芳廣(Kubota, Yoshihiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1978
Jtitle	哲學 No.67 (1978. 3) ,p.176- 177
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田哲学会例会発表要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000067-0176

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

発話行為としての絵馬奉納

久保田 芳 廣

この発表は、『民族学研究』42巻4号掲載の論文の前半部分を発展させたものである。そこでここでは発表のさいに提出された疑問点を考慮して、報告の内容について簡単にその大意を述べつつ、この論文執筆の経過を明らかにしてみたい。

この論文は、「人々は絵を前にしてなぜ祈るのか」というテーマによる小サークルでの報告が母体となっている。その報告では私は、ハイチのヴォードゥー教徒たちが固有の精霊の体系に基づく独自のイコノグラフィーを持ちながら、これと矛盾するにもかかわらず、代用としてカトリック聖人の画像を礼拝のさいに用いるのはなぜかという M. Herskovits や M. Leiris 以来の問題（例えば、蛇を退治する聖パトリックの画像が、蛇体の精霊であるダンバラの像として用いられる）をとりあげ、宗教絵画の特徴は再現性よりも記号性表現性が優先することにある、しかも記号性にもいくつかの発展段階があるのではないかという主張を行なった。ヴォードゥー教の研究者達は、上記の事実をカトリックとヴォードゥー教の習合の結果という解釈をするのが定説であるが、ヨーロッパにおける土着信仰とキリスト教や我が国における民間信仰神道仏教の習合の場合と比較して、観念の形式の上ではもちろんのこと、図像学の上でも、習合の過程に現われる種々の困難を解決するための闘いの跡が見られない。そこからヴォードゥー教における習合が、まだ始まったばかりか、あるいはきわめて緩やかな習合を許容する心性をハイチ人が持っているかのどちらかであると我々は考えざるをえないが、この事実はむしろ、宗教絵画では、そこに何が描かれているかより、人々がそこに何を認知するかということにポイントが置かれていることを如実に示している。宗教絵画は、鑑賞の対象というより、様々な程度において、儀礼の対象である。従ってその意味は儀礼に依存している。広い意味で、神と人とのあいだのコミュニケーションの形式とみなされる宗教儀礼は、これを行なう主体の意図に基づき、宗教史的あるいは文化的に規定された一定の規則に従って、基本的なメディアとして身振り、音声、自然物に始まり、さらにそれらが複合したメディアである図像、文字、呪具等によって目に見える形に、不完全に、あるいは完全に自律的な形で具現化される。絵の前で祈るということは、絵画という媒体、口頭の言葉、祈禱者の身振り、祈禱者自身の存在によって対象化された行為である。もし絵画の中に祈りの言葉が文字の形で記されれば、口頭の言葉に代って文字による対象化が行われたと考えられる。このように人間の意図や観

念の対象化の仕方や完全さの程度は様々である。従って宗教儀礼に関して言えば、種々のメディアから意味を引き出すためには、核となっている意図された行為が何であるかを明らかにせずには不可能であること。反対に言えば、宗教的メディアは必ずしも自律的ではないと言えるから、異なったメディアの間での相互参照が可能となる。

こうした観点からすれば、絵画としても、宗教儀礼としてもきわめて周縁的ではない絵馬のような現象も、その画題の分析やそれに付せられた銘文の分析によって、絵馬というものの自体や簡略にしか描かれない画題も、一個の首尾一貫した行為の位置づけ、またその位置づけによって画題の意味も解釈が可能であると考えられる。絵馬奉納は、問題解決のための伝統的な方策の一つである。絵馬奉納という行為の構造は、この問題解決の構造およびそれを物語の形で表わした霊験譚や絵馬奉納に近隣したジャンルである呪文の構造と同一である。絵馬の画題は、この構造を構成する諸要素（祈願の対象、祈願者、祈願内容—否定的状態、祈願内容—肯定的な内容、否定的な状態の原因となる存在または事件、実現の手段）の一つあるいはいくつかを組み合わせたものであり、その限りにおいて絵馬は他のジャンルの絵馬に移行してしまふことがない。絵馬奉納は願望の成就の前にも後にも行われ、祈願、呪術、報謝という異なった宗教行為のカテゴリーに属している。これらの宗教行為は、さらに依頼、命令、感謝といった一般的な行為のカテゴリーに属している。依頼、命令、感謝等の行為は、英国の言語哲学者である Austin および Searle によって発展された “illocutionary act” の類型として、行為成立のための諸規則が明らかにされているが、この議論によってもまた上にあげた絵馬奉納行為の構造と同一のものを取り出すことができる。この概念のもつ利点の一つは、illocutionary act には、命題を述べる部分とそれに対する話し手の態度とを区別するという点にある。命題内容は、宗教行為の場合、宗教的信念の形をとるが、絵馬奉納に關与する祈願、呪術、報謝などは、この宗教的信念に行為者の意図がプラスされて成立する信念の現実的諸形式と解釈できる。言語において話し手の意図を表わす陳述の部分は比較的あいまいにしか表現されず、また図像の場合、ほとんど表現されないので、表現構造の同一性が霊験譚の再生産の原動力となっている。

また図像の行為的な使用を認め、しかも行為として同一のカテゴリーに属するならば、宗教的であれ、世俗的であれ、また古代的であれ、現代的であれ、表現構造は同形であり、要素間の相互交換もまた可能である。